弘学時報
第 96 号
(年4回発行)
編集発行
弘前学院大学
広報委員会
印刷所
(有)小野印刷所

2024（令和5）年度 9月期学位記授与式挙行

2024（令和6）年度9月期の学位記授与式が去る9月26日（木）午後2時30分より本学礼拝堂において挙行されました。

コロナ対策をしつつ、小寺理事長のご出席のもと、関係学部の教職員の見守る中、厳粛に式が執り行われました。坂井任学科長の司会により、パイプオルガンの演奏に始まり、石垣雅子宗教主任の聖書拝読、祈祷の後、藁科勝之学長より卒業証書が授与されました。その後学長より卒業生にお祝いと励ましの言葉がありました。

式終了後には、卒業生に藁科学長・小寺理事長より、またご出席された教職員の皆様から、お祝いの言葉や励ましの言葉が交わされ、関係教員を代表して井上諭一先生よりお祝の花束が贈られました。記念写真を撮影したりして、卒業生の新たな旅立ちを共にお祝いしました。前途に神の祝福がありますよう心からお祈りします。

教育の質保証と学修成果

学校法人弘前学院
学長　藁科　勝之

今から三年前（二〇二一）のこの「弘学時報」に、「弘学の今後の課題―教育の質保証と学修成果をめぐって―」として、ほぼ同じタイトルで書いたのですが、当時のこの課題は今でも続いているのです。

実は、その翌年の今から二年前（二〇二二）のこの「弘学時報」でも、「ディプロマ・ポリシー（DP）と学修成果とその可視化」として、前回のテーマとその進展状況について書いております。これらを振り返りながら、今回のテーマについてお話します。

大学に求められている教育の質保証については、中央教育審議会のグランドデザイン答申（「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」（平成30年）が「大学の現在の教育の質保証の取組は不十分」と述べ、その例として「事前学修・事後学修に費やす時間数が不十分である」と述べ、米国と比較して日本の学生の、授業以外の学修時間の短さに関する指摘です。

これは単位の実質化といわれる取組で、単位制度の根幹に関わる問題なのですが、実は、我が弘学においても事前学修・事後学修は「学修行動・学修成果アンケート調査」にもその低さが表れており問題です。そこで、実施の徹底を図るべくシラバスにも書き込むこととしております。

もう一つの課題は、学修成果の可視化と情報公表の促進です。学修成果の可視化は、大学教育の質保証にとって、今でも最も重要な指標の一つになっています。

まず学修成果について、従来の秀優良可などではなく、中教審の言う学修成果とは、ディプロマ・ポリシー（DP）の達成度です。人材養成機関としての大学が、卒業時にどのよう能力を持った人材を育成したか、これをDPの具体的項目に即して、可視化するわけです。卒業時に、身に付けたものを、どのような指標で測り、どのような達成度なのかを測定するという課題があります。本学ではそのために「アセスメント・ポリシー」を策定しましたが、その十分な具体的な運用・活用は今でも課題と言えます。

さて、このDPについて中教審の答申を振り返ると、平成17年「高等教育の将来像」ではAPに重点が置かれてCP・DPは必要に応じて明確化、平成20年「学士課程教育の構築」ではDPの重視であり、学士課程教育における学士力の内容提示、DPの具体化・明確化でした。平成24年「大学教育の質的転換」ではDPの明示、改革サイクル構造の定着な平成17年「高等教育の将来像」では、APの明確化、CP・DPも必要に応じて明確化など、この時はAPに重点が置かれ、平成20年「学士課程教育の構築」では、学士課程教育における3つの方針の明確化、学士力の内容提示、DPの具体化・明確化などであり、DPの重視でした。平成24年「大学教育の質的転換」では、DPの明示、改革サイクル構造の定着など、そして平成28年「3ポリシーの策定及び運用に関するガイドライン」では、3ポリシー策定の意義・重要性及びPDCAサイクル、内部質保証、その自己点検評価と改善でした。

このように、当初はAP重視、次いでDPの明確化と進み、そして重視の度合いを強めてきたのが3ポリシーを踏まえての内部質保証でした。本学もこれに沿って、3ポリシーを具体化し公表してきました。

しかし、学修成果の可視化とともに、とくにディプロマポリシーの達成度の測定及びその可視化の課題に次年度以降さらに取り組むこととしておりますが、DPの達成度をどのように表示できるか、これが大きい課題です。またそしてこれらを踏まえた「学修ポートフォリオ」の実施・運用が次年度の教学上の大きな取組です。

2024年度弘学祭レポート

学祭実行委員長　佐藤　ゆき

今年度の学祭のテーマは、「Wish～今この瞬間を～」とさせていただきました。今この瞬間を全力で楽しもうという意味や、限られている時間を一瞬一瞬大事に過ごすという意味を込めて考えられたテーマだったと思っております。

私事ですが、今年度の学祭で2年連続学祭実行委員長を務めさせていただきました。そのため、今年度は昨年度との違いや、昨年度の失敗した部分やそこから学び見つけた改善点など経験を活かしつつ奮闘しました。具体的な内容としては、企画の順番を変更することで、来てくださった方々の足を止めることに繋げたり、昨年度は閉会式まで行うことができなかったためスムーズに閉会式まで流れを持っていくための工夫をしました。

今年度の学祭の企画はいかがでしたでしょうか。学祭恒例のお笑いライブは満席にすることはできませんでしたが、体育館内は大変盛り上がっておりました。来ていただいたインポッシブルさん、西村ヒロチョさん、やさしいズさん、しゅんしゅんクリニックPさん、こちらの4組の芸人のおかげで楽しく、そして盛り上がった企画となりました。また、私は企画の1つであるビンゴ大会にも携わらせていただき、運営側の忙しさや大変さ、楽しさや達成感を感じることができました。自ら景品の買い出しに行き、参加してくださる方々は何を貰えれば嬉しいのかを考えながらの買い出しは楽しかったです。ビンゴで出てきた数字を言うと参加者の方々は一喜一憂していて、真剣に取り組んでいただいて嬉しく思いました。また、カラオケ大会では、今年度は16人もエントリーしていただき、こちらも大変盛り上がりました。普段の学生生活では見ることのできない学生の姿は皆さんにはどのように映っていたでしょうか。人前に立つということを苦手とする方も多い中で、歌うことができるのはとてもかっこよかったですね。16人の参加者の方々、参加していただきありがとうございました。

私にとって2度目の学祭は大成功を収めることができました。まさか本当に今年度も学祭実行委員長を務めることができるとは思っておらず、2年連続で為になる経験を味わうことができました。今年度の学祭で学んだことを活かして、来年度はもっと良い学祭を行うことができるように私もなにかサポートできたらと考えております。今年度の学祭にお越しくださった方々、出店していただいた方々、ご協力していただいた方々に改めてこの場をお借りしてお礼申し上げます。

二〇二四年度 一年生特待生授与者

二〇二四（令和六）年度の弘前学院大学特待生（一年生）に、十一月六日（水）十二時より賞状の授与が行われました。今年度の授与者は次の方々です。

◆文学部
一年　伊藤　千乃

◆社会福祉学部
一年　藤田　叶羽

◆看護学部
一年　高橋　里桜

研究紹介60

看護教育へのSocial Skills Trainingの活用

看護学部　看護学科　准教授　阿部　智美

私は看護教育で1、2年生を対象とした看護技術の演習や基礎看護学実習を担当してきました。そのため、取り組んだテーマは、教育に関することが中心で、特に看護学生のコミュニケーションに関することが多いです。

看護学生のコミュニケーションに関するテーマに取り組んだきっかけは、実習で学生が、患者さんとコミュニケーションに戸惑うことがあり、私自身も学生にどのように対応したらよいか悩んだことがありました。そこで、看護学や社会心理学のコミュニケーションに関する解説書や研究報告を読みました。その中で、ヒントとなったのが、Social Skills という考え方と、Social Skills Training（以下、SST）という方法でした。

Social Skillsは、コミュニケーションなど社会生活に役立つスキルで、練習によって身につくという説明がありました。SSTは、Social Skillsを身につけるトレーニングで、モデリング（観察学習）やフィードバックなど様々な技法を取り入れた方法でした。

看護教育にSSTを活用することで、解決に少し近づけたと思う経験もありました。1つ目は、実習場所が変わり、実習方法などの違いもあって、学生へのコミュニケーションの指導に悩むことがありました。その際に、SSTの書籍を参考にして「初めての実習でのコミュニケーション」と題した小冊子を作成しました。小冊子では実習場面ごとに、挨拶や報告の仕方などの具体的な例を入れて解説しました。学生は実習ファイルに小冊子を挟んで活用していることがあり、少しは役立ったのではないかと思いました。

2つ目は、コロナ禍で病院での実習が出来ず、学内実習になった時でした。その際に役立ったのが、SSTの方法でした。グループで患者事例を共有し、初対面での挨拶など場面を設定して練習しました。小冊子「初めての実習でのコミュニケーション」を活用しながら、看護学生としてのコミュニケーションのとり方で、良かった点や改善点について意見を出し合いました。今後の実習に向けて、学生は出来るだけ具体的な体験を通してコミュニケーションについて学ぶことができたのではないかと思います。

その他に、SSTを学ぶことで、私自身も教育以外の場面で役立ったことも多いです。実践報告が多いですが、実践したことを書いておくことで、良かった点や改善点も合わせて役に立てれば幸いです。

談話室

呼吸のコツ

文学部　英語・英米文学科　教授　奥野　武志

数十年前の話になる。大学の空手部に入った私は身体が硬く、股割（またわり　開脚して上体を前に倒す運動）がうまくできなかった。三年生になったある日、私が道場で股割に取り組んでいると、大学の空手の授業を担当している先生が通りかかり、「息をゆっくり吸って」、「今度は力を抜いてゆっくり息を吐きながら前に倒して」とそばで助言してくれた。その指示通りにやったところ、それまで何千回やってもできなかった股割がすんなりできてしまった。魔法にかかったようでびっくりしたのだが、その先生は『啐啄同時（そったくどうじ）』ということだよ」と仰った。「啐（そつ）」は卵からかえるひなが殻の中からつつくこと、「啄（たく）」は親鳥が殻の外からつつくことだそうだ。

その後全体稽古をしていた春休み、見知らぬ小柄なお年寄りがふらっと大学の道場に現れた。応対した私にその人は「卒業生の〇〇と言います」と穏やかに名乗った。そして部員たちの稽古の様子をしばらく見た後、「呼吸がだめですね」、「もっと『いき』を意識して稽古した方がよいですよ」と助言をくれた。『いき』というものはらせんになっていて、その交点に力を集中するようにするのです」と〇〇さんはジェスチャーつきで私に示してくれた。さらに、「このコツは素手の稽古で体得するのは難しいが、『つるぎ』を使うことでつかむことができます」と言い残して静かに道場を去っていった。

そのへんにいるごく普通のお年寄りに見えた〇〇さんは伝説の達人だった。合気道の開祖が帰依していたことで知られる某宗教の本部で長年武道の研鑽を続け、ついに極意をつかんだ時期だったことを後に知った。その極意を惜しみなく初対面の後輩の私に伝授してくれたのである。ただ実のところ、そのコツは今に至るまで体感できていない。が、今も細々と続けている稽古が本質を大きく外れないような道標にはなっている気がする。

祝福式の開催報告

看護学部　看護学科　教授　佐藤　厚子

祝福式は3年生後期から1年にわたる実習が開始される前に行われる学部行事で、今年度は2024年8月3日に行われました。建学の精神である『畏神愛人』に則り、「臨地実習で高い倫理観と責任感をもって看護を実践することができるよう、看護への思いを新たにし、自らのありようを考える機会にする」ことが目的です。

弘前教会オルガニストの秋山恭子さんの厳かな奏楽に導かれ、式が始まりました。石垣雅子宗教主任の説教は「最も小さい者の一人に」でした。看護を必要としている人に寄り添うことは神に仕えることと同じであるとのお言葉を頂きました。

4年生の今井樹利亜さんからは「みなさんは神に愛され生かされている尊い存在であり、立っていても、倒れても、そこは神の愛の御手の中であることを忘れないでください。」と力強い励ましの言葉がありました。点火は今井樹利亜さん、太田稀綾さん。4年生から3年生に聖なる火が渡されました。最後に学生54名全員が声を合わせ、「わたしたちは、人々の心に寄り添い、最良の看護ができるよう

に常に祈ります」と誓いました。今年度は保護者の出席を募集し、14名が共に祈りました。「とても良いひとときでした」と皆さん笑顔でお帰りになりました。祝福式後のアンケート調査では多くの学生が「看護への思いが新たになった」と答えました。

看護における祝福の意味を考え、神のお導きを覚える貴重な行事でした。

コンソーシアム弘前「共通授業」レポート

社会福祉学部　社会福祉学科1年　阿部　万結子

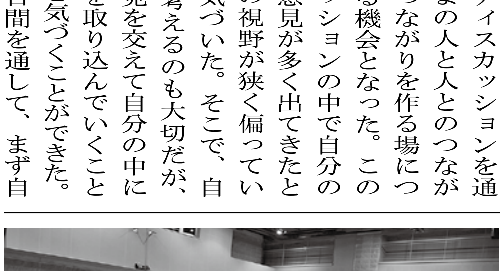
本授業は多角的な視点から社会問題を見つめ、今後自らアクションを起こしていくところまで考える貴重な機会となった。3日間全く違うテーマで社会について自ら考えることで、自分がいかに偏った視点で世の中を見ていたのか気づくことができた。そして、もし自分が当事者だったら、本当は私自身当事者なのではないか、と「もし」という視点で社会問題について考えようとすることが大切だと感じた。

1日目のテーマ「性の多様性と学校教育」では、LGBTや性教育について改めて考える機会となった。この1日目を通して、私はLGBTや性教育について「LGBTの人は大変そうだ」「性教育は必要だろう」と、どこか他人事として捉えていたことに気づき、今後はもっと当事者に寄り添った目線で考えることが大切だと気づくことができた。

2日目のテーマ「地域イノベーションをデザインする」では、地域をイノベーションするためにどうしたらいいのか具体的な案まで考える機会となった。この2日目を通して、私は地域についてイノベーション・発展とういう視点で全く考えたことがなかったと気づいた。そこで、自分も地域の一員であることを当たり前と放置せず、一員であるからこそ自分には何ができるだろう、住みよい場所にするにはどうしたらいいのだろうと考え続けることが大切だと気づくことができた。

3日目のテーマ「社会的つながりとウェルビーイング」では、グループディスカッションを通して、いまの人と人とのつながりやそのつながりを作る場について考える機会となった。このディスカッションの中で自分の中にない意見が多く出てきたとき、自分の視野が狭く偏っていることに気づいた。そこで、自分自身で考えるのも大切だが、他人と意見を交えて自分の中にない視点を取り込んでいくことも大切だと気づくことができた。

この3日間を通して、まず自分で考えてみること、次にほかの人だったらどうだろうと考えてみること、最後に実際に他の人の意見を聞いてみることが大切だと気づくことができた。これを機に、今後も多角的な視点をもって社会を捉えられるよう実践していこうと思える貴重な体験になった。



令和6年度　国語国文学会夏季大会報告

日本語・日本文学科　教授　坂井　任

7月6日（土）13時から本学1号館大講義室において国語国文学会夏季大会が開催されました。学内・学外から24名の参加をいただき、感謝いたします。今年は猛暑の訪れはまだとは言え、汗ばむ陽気ではありましたが、冷房が完備した教室で快適に行えました。

まず、大学院文学研究科2年尾崎聖人氏が、「スサノヲの出雲平定譚考―山海の神から田の神へ―」の題で研究発表を行いました。『古事記』や『出雲国風土記』に現れるスサノヲ（須佐之男命）の記述を元に、八俣の大蛇退治の前後でのスサノヲの性格の転換とその理由について考察したものです。乱暴な振る舞いから出雲へ追放となったスサノヲが、ヲロチ退治を経てクシナダヒメとの婚姻を通じて農耕の神の性格へと変化したとし、大蛇退治と農耕儀礼との関係を論じました。最後に、八俣大蛇退治と大国主神の国譲り神話とには構図に共通点が見られることを指摘し、今後考察を進めたいとのことでした。フロアからは多数質問があり、修士論文の完成に向け、有意義な議論ができたことと思います。

次に、文学研究科教授今村かほる氏より、「方言と共通語の教育―実践方言学の立場から―」と題して発表がありました。世界には多くの消滅危機言語がありますが、日本でもアイヌ語、八丈島や沖縄の方言が危機言語にあげられています。危機の背景の一つとして、標準語・共通語教育があります。今村教授は、戦後の学習指導要領は標準語と共通語の用語の変化はあったものの、方言を避ける姿勢で一貫していましたが、平成に入り変化が見られ、方言の尊重が国語審議会・文化審議会の答申でうたわれるようになったことを指摘しました。

東日本大震災以後、方言を始めとする地域文化の価値が見直され、平成29年度の学習指導要領解説では、方言の役割について、本学を含む被災地方言に関する取り組みの成果が盛り込まれたということです。さらに、青森県の方言に対する今村ゼミの「実践方言学」の活動を通じた、方言の積極的な伝承の取り組みを紹介しました。

ともに質疑も活発で、予定時間を30分以上超過するほどでした。最後に井上諭一教授から、総括としての講評がありました。

この大会の準備・運営は、国語国文学会学生委員によって行われました。重ねてお礼申し上げます。

2024年度ハロウィーンパーティー

2024年10月25日に文学部のハロウィーンパーティーを行った。学生66名と教員6名が参加した。参加者の何名かはコスチュームを着てパーティーを楽しんだ。最初のアクティビティはグループごとにかぼちゃでJack-O-Lanternを作ることで、いろいろな面白いデザインができた。作りながら、参加者がハロウィーンお菓子を食べた。

最後に今年もTrick-or-Treatを体験できた。1号館のなかに様々な所をハロウィーンの飾り物を掛けて、少し怖い雰囲気にした。参加者があちこちにTrick-or-Treatをして、菓子を貰いながら、本物のアメリカンハロウィーンを経験することができた。参加者の皆さんはとても楽しいハロウィーンパーティーを過ごして、アメリカ文化を勉強することができた。

2024年度 English Camp　大阪EXPO2025向けた英語を使った学びのワークショップ

弘前学院大学イングリッシュキャンプが8月3日（土）に開催されました。文学部学生約100名、英語・英米文学科教員5名と聖愛高校生徒2名と教員2名が参加しました。今年のテーマは「EXPO!」（万国博覧会）で、1日中英語のみを使って様々なアクティビティを行いました。参加者はグループに分かれ、英語が流暢なスタッフと一緒に1日中楽しみながらアクティビティに参加しました。午前中は3つのアクティビティが実施されました（万国博覧会の歴史クイズ、万国博覧会で発表された発明品についての批判的思考アクティビティ、万国博覧会・EXPOのホスト国についてのケーススタディ・アクティビティ）。万国博覧会の歴史クイズでは、グループで質問に答えることで、過去の万国博覧会の特徴、有名な場所、建物、美術について学びました。批判的思考アクティビティでは、ヒントを頼りに過去の万国博覧会で発表された発明品とその背景を学びました。ヒントは難しくても、1グループは100%正解できた！ケーススタディ・アクティビティでは、グループごとに過去の万国博覧会・EXPOのホスト国を1つ選び、その国に関する重要な情報を調べ、それを地図に貼ることで、万国博覧会の歴史的な意義や地理的な特徴を再認識しました。

午後は、グループごとに大阪EXPO2025へ参加する国の一般情報、産業/観光の魅力ポイントとEXPO2025のパビリオンのアイデアを考え、ポスターを作成しました。その際に、参加者は各国の文化的な特徴を調べることで、異文化理解を深めることができました。また、各ポスターに示された各国についてのクイズ問題は、他のグループや参加者に新たな学びの機会を提供しました。このように、今年度のEnglish Campは、万国博覧会・EXPOとその歴史についての知識を深めるだけでなく、来年開催される大阪EXPO2025への関心を高める意義のある英語での学びの機会となりました。

「社会福祉実習Ⅰで学んだこと」

社会福祉学部　社会福祉学科　2年　葛原　楓加

私は事前に施設の特徴などを調べるなどして、実習に臨もうとしましたが、初めての実習であるため、コミュニケーションの図り方に不安がありました。実習先で過ごす人たちの様子は、施設内で好きなことをしたり健康に気を使って運動をしたりしており、それを見て、明るく自分らしく生活できる場だと感じました。8日間の短い実習の中、実習先の方々とかかわり、コミュニケーションする中で「笑顔」が大切だと感じました。最初は、緊張や不安の気持ちが表情に出てしまい、笑顔が少なくなってしまいました。そこで、実習先の社会福祉士の方から「笑顔でいることで相談のしやすさや話しかけやすさに繋がること」を学びました。そこから、できるだけ笑顔でいることと、たくさん自分から話しかけることを意識するようにしました。実習の後半には、周りから話しかけてくださることも増えて、笑顔の大切さを実感できました。来年の実習先でも、今回学んだ笑顔を忘れずコミュニケーションを図るようにして、多くのことを学べる機会にしたいと思っています。

社会福祉学部　社会福祉学科　2年　對馬　隆栖

今回の実習は初めての社会福祉実習だったので、8日間の短い期間でしたが、初めて体験することが多く、とても勉強になりました。その実習の中で、特に印象に残った学びが2つあります。1つ目は、一人ひとりに合わせた対応方法です。実習中、作業に集中できずにいる利用者さんがいました。私が対応に困っていると、担当職員の方がその利用者さんの好きなスーパーヒーローになりきって、上手に作業に戻るように促してくれました。このことから、個々人の趣味や好きなものを把握することで効果的な支援に繋げられることを学びました。2つ目は相談の重要性です。利用者さんの間で問題が生じ、その現場を目の当たりにすることもありました。しかし、正しい接し方が分からず、何もできずに後悔したことがありました。このことを現場の社会福祉士の方に相談し、正しい対応方法などについての助言を頂きました。それにより、私は気持ちの整理がつき、その後の実習に集中することが出来ました。現場での葛藤や悩み事などは、些細なことでも周りに相談することが大切だと学べました。初めは不安や緊張感でいっぱいでしたが、実習先の方々とのコミュニケーションを通して、様々な体験や学びをすることができ、充実した実習を行えたように思います。今回の経験を次回の実習にも活かし、さらなる成長をしていきたいです。

看護学部卒業研究発表会の報告

看護学部　看護学科　講師　小野　綾

11月上旬、看護学部の卒業研究発表会が今年も無事に終了しました。この発表会は、4年生にとって学士号取得の集大成であり、教員にとってもその指導成果を目にする特別な機会です。発表では、学生たちの努力と成長が随所に感じられ、教員一同、大きな喜びと誇りを感じました。

4年生にとってまさに試練の連続でした。実習や国家試験の勉強に追われる中で、卒業研究にも取り組むという非常にタイトなスケジュールをこなしてきました。その過程で、時間管理能力や優先順位を考える力、そして生活リズムを整える術を身につけ社会に出る準備にもなりました。これらのスキルは、看護の実践や将来のキャリアにおいて大いに役立つ財産となるでしょう。

卒業研究は、テーマの決定から計画書の作成、実施、そして発表に至るまで、一連のプロセスを通して自ら考え行動する力を養う場です。今年の学生たちもまた、困難に直面しながらもそれを乗り越え、自らの研究成果をしっかりと形にしてくれました。その姿には、教員としての指導者冥利を感じると同時に、未来への可能性を確信させられました。

今回の卒業研究で得た経験は、必ずやその基盤となるはずです。実際に現場での看護実践を行う際や、さらなる学びを深める中で、研究的な視点や問題解決能力が求められる場面は数多くあります。そのような場面で今回の努力が役立つことを願ってやみません。

何よりも、学生たちが心身ともに挑戦し、大きなことを成し遂げたという事実を、教職員として誇りに思います。これからも卒業研究が、学生一人ひとりにとって有意義な学びの場であり続けるよう、学部全体で教育環境の充実を図ってまいります。

弘学祭企画

２０２４年度弘学祭は多くの方々によりご協力をいただき、無事に終了いたしました。ご協力いただきました地域の皆様、関係者の皆様、またご来場くださいました多くの皆様へ心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

学祭実行委員会による企画のほかにサークルなど学内団体による展示や発表、模擬店出店、外部団体にもご参加いただきました。

昨年度が４年ぶりの開催となり、今年度は再開してから２回目の開催でした。学祭が初めての学生も多く、昨年度経験した学生が委員をまとめ、企画・運営を進めてきました。大変だったこともあったかと思いますが、学生同士、教員も含め協力し合いながら最後までやり遂げたことで日ごろの学生生活とは違った経験を通し、良い学びを得ることができたのではないでしょうか。

ここで展示や発表等各企画を紹介します。

■看護のちから展

看護学部で６つの企画が実施されました。

①野菜をとろう～ベジチェックで野菜摂取レベルをチェックし、簡単野菜食メニューを試食しよう！～

ベジチェックで推定野菜摂取量の測定および、食生活改善推進委員による野菜食メニューの紹介

②転倒予防トレーニングスリッパを体験してみよう

１日10分履くだけで転倒予防ができる「コロバンヌ」というスリッパの体験

③ほほえみサロン

乳がん患者の体験談、乳がんセルフチェック、ケア帽子づくりのワークショップ

④学生考案！手作りおもちゃで子育て応援！

学生が作成した手作りおもちゃの展示、紙コップタワーなど実際に遊ぶスペースの提供

⑤健康運動指導士による健康運動相談

健康の保持促進、生活習慣病の予防、介護・認知症予防などに関する相談を承り、日常生活で実施できる食習慣や運動トレーニングなど改善方法を提案

⑥ＣＡＰってなぁ～に

ＣＡＰはＣｈｉｌｄ　Ａｓｓａｕｌｔ　Ｐｒｅｖｅｎｔｉｏｎ（子どもへの暴力防止）の頭文字をとったもので、子どもたちがいじめ、虐待、性暴力、体罰等さまざまな暴力から自分を守るためにできることを学びあう人権教育プログラムでポスター等の展示

■語り部ネットワーク講演会・語りの動画

茨城大学　教授　杉本妙子先生による「地域のことばの継承と昔話―茨城での取り組みを中心に―」という演題での講演の実施、講演終了後は方言に関わる冊子の展示と語りの動画の上映

■言語のメロディー：AI、音楽、文化の洞察

ゼミ生がＡＩで作成したさまざまなジャンルの曲を聴く

■World Expoについて知りましょう！

来年の大阪Ｅｘｐｏについて過去のＷｏｒｌｄ　Ｅｘｐｏとその特徴に関するポスターとその国のお菓子の展示

■国語国文学会展示

国語国文学会の活動報告として文学散歩ポスター、学会誌・会報の展示

■超絶スピーカーを聴く

バックロードホーン、マトリックススピーカーでクラシックやジャズなどを聴き、スピーカーの違いを感じる

■イラスト同好会

部員が制作したイラスト・写真・立体作品の展示およびスタンプラリーを実施

スタンプラリーはスタンプを集めるとイラストが完成する

■華道部華展

部員による生け花の展示と説明

盛岡を巡って

文学部　日本語・日本文学科３年　工藤　美紅

今年度の国語国文学会の文学散歩は、盛岡市内の歴史や文化、岩手県にゆかりのある文化人（宮沢賢治、石川啄木など）に関わる施設を巡りました。以下、訪問した見学先と詳細になります。

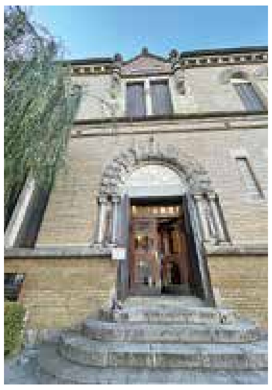
①盛岡八幡宮　馬を祀る神社で、馬の像の前には人参が奉納されていた。当日は七五三や結婚式が行われており、盛岡市民の文化的活動に深く根付いた施設であることを体感した。

②啄木新婚の家　随筆「閑天地」の一編「我が四畳半」の舞台となった、啄木が新婚生活を過ごした家。啄木が実際に住んでいた中で唯一現存する家で、低めの天井や囲炉裏など、当時のリアルな生活を見ることができた。

③もりおか歴史文化館・盛岡城跡公園　盛岡周辺がどのように発展し、どんな文化が芽生えてきたのかを知ることができた。南部藩としての青森県の南部・下北地方との関わりや、地域を治めていた偉人に関する展示が数多くあった。また、企画展として「藩校助教藤井又蔵の足跡」が開催されていた。併設している城跡公園では、文化の日ということもあり、紅葉の色づく中多くの市民が訪れていた。

④もりおか啄木・賢治青春館（旧第九十銀行本店本館）

啄木・賢治と同じ盛岡中学校出身の建築家・横濱勉が設計した建物。当時の盛岡はモダンな建物が建ち始めた頃で、ベージュの煉瓦造りの外観が特徴。中では石川啄木・宮沢賢治の略年表などが展示され、企画展「啄木顕彰のあゆみ」も開催。一階の喫茶店では『一握の砂』『やまなし』など、彼らの作品の書籍が販売されていた。



昨年度と同じ岩手県への文学散歩となりましたが、更に啄木・賢治の２人について知見を広げられると思い企画しました。結果、多くの学生に参加して頂くことができ、成功裡に終えることができました。参加者、その他ご協力してくださった方々にこの場を借りて御礼申し上げます。来年度も開催予定ですので、ぜひご参加のほどよろしくお願いします。

「地域とつながる」

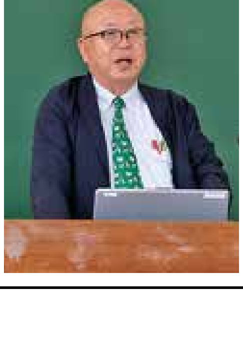
地域総合文化研究所　主事　井上　裕太

10月13日、弘前学院大学地域総合文化研究所講演会「地域とつながる」を大講義室で開催しました。本講演会は、文学部、社会福祉学部、看護学部それぞれの視点から、地域を見つめ直す試みとして企画したものです。内容は、「青森とロシアの交流の歴史と展望―両地域の交流の歴史を踏まえて―」（一般社団法人青森市国際交流協会・工藤朝彦会長）、「弘前女学校における女性宣教師とその時代―慈善事業・社会事業から―」（本学社会福祉学部、大学院社会福祉学研究科・松本郁代教授）、「看護学部の地域連携活動の紹介」（本学看護学部・髙田まり子教授）の３題でした。

工藤氏には、江戸時代から現在に至るまでの日本とロシアの交流の歴史について、豊富な資料を交えて具体的な事例をもとにお話いただきました。そうした交流は、ロシアのウクライナ侵攻により停滞していますが、そんな今だからこそ、立ち止まって過去の歴史を振り返るきっかけとなりました。

松本氏には、弘前女学校（現・本学）のあゆみについて、宣教師、弘前学院外人宣教師館、慈善事業・社会事業の各観点からお話いただきました。当時の宣教師の活動に具体的に迫る内容であり、本学の歴史の一端を知ることができました。あわせて講演会当日は、国の重要文化財の弘前学院外人宣教師館も公開していたため、建物の文化的価値についても知っていただく機会となりました。

髙田氏には、看護学部で行われている、地域連携の具体的取り組みをご紹介いただきました。看護学部は学部の特性上、地域に出ての活動が多く組まれていますが、そうした活動を多くの方に広く知っていただく貴重な時間になりました。

一般の方のご参加もあり、「青森とロシアの交流の歴史は、初めて聞くことばかりでとても興味が深かった」「弘前の地域の歴史にまつわるお話をたくさん聞けたので、とても楽しかった」「看護学部の活動や働きが良く解り、とても参考になった」などの感想が寄せられ、盛況裡に講演会を終えることができました。

なお、本講演会の運営には本学学芸員課程の学生が携わり、受付・案内等を手伝いました。学生にとっても、講演会の企画・運営に関する実務経験を積む貴重な機会となりました。